

令和7年度 大阪市立大正西中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

【成果と課題】

【国語科】

【調査結果概況について】

- ・平均正答率は大阪府平均-7%、全国平均-9.3%と、平均正当数とともに下回る結果となった。
- ・正答数ごとの層分布においても、0-6問の最低位層が本校全体の約半数おり、本校で最も多くを占めている。低位層・中位層の引き上げが課題である。
- ・正答数が最も多かった生徒は、14問～12問までが0人、11問正答が2人だけであった。11問以上正答の上位生徒についても、大阪府、全国と比較して少ないもの、上位層の引き上げにも注力したい。

【問題別調査結果について】

- ・全国正答率と本校の正答率との差が最も大きかった問題は、「ちらしに「会場図」を加えた目的を説明したものとして適切なものを選択する」という問題であり、全国正答率82.5%に対して、本校正答率64.5%であった。
- ・学習指導要領の内容別では、「B書くこと」の領域で平均正答率の差が最も大きく、全国52.8%、大阪府50.5%、本校38.1%であった。
- ・問題形式別では、平均正答率が全国平均と差が大きかったのは、短答式-10.9%に次いで、記述式-10%であった。

【数学科】

【調査結果概況について】

- ・平均正答率は大阪府平均-10%、全国平均-11.3%と下回る結果となった。
- ・正答数ごとの層分布においても、0-4問の最低位層が本校全体の約半数おり、本校で最も多くを占めている。低位層・中位層の引き上げが課題である。
- ・正答数が最も多かった層の生徒は、2問が11人、5問正答が8人であった。10問以上正答の上位生徒についても、対大阪府-6%、対全国7.3%と低いため、上位層の引き上げにも注力したい。

【問題別調査結果について】

- ・全国正答率と本校の正答率との差が最も大きかった問題は、「連続する三つの3の倍数の和が、9の倍数になることの説明を完成する」という問題であり、全国正答率45.2%に対して、本校正答率21.0%（対全国-24.2%）であった。
- ・学習指導要領の内容別では、「思考・判断・表現」の領域で平均正答率の差が最も大きく、全国39.1%、大阪府37.4%、本校26.1%（対全国-13.0%、対大阪府11.3%）であった。
- ・問題形式別では、平均正答率が全国平均と差が大きかったのは、記述式-12.5%に次いで、選択式-11%であった。

【理科】

【調査結果概況について】

- ・理科はCBT方式での実施となった。IRTスコアが、全国503、大阪府487、本校439で下回る結果となった。

【問題別調査結果について】

IRTバンド1の割合が1.5%で対大阪府-3.8%、IRTバンド2の割合13.4%で対大阪府-4.4%、IRTバンド3の割合38.8%で対大阪府-0.6%、IRTバンド4の割合29.9%で対大阪府-1.2%、IRTバンド5の割合16.4で対大阪府10.0%であった。

「粒子」を柱とする領域の問題のうち1問が平均正解率が対大阪府を上回った。

【今後の課題】

【国語科】

以前からの課題であった「書くこと」の領域や記述形式の問題について、依然として課題があるので、授業で「書くこと」に力を入れて指導していく必要がある。しかし、漢字や語句の知識、文法などの知識については、家庭学習や小テストの継続によって、定着がみられる。今後は、文章を正確にできるだけ素早く読解し、自分の考えを形成し、適切な文章で表現できる力の育成に重点を置いて取り組みたい。

【数学科】

領域に関しては「思考・判断・表現」、問題形式別に関しては「記述式」に関して依然として課題があるので、「問題を把握し思考し課題を解決する」「思考の過程を表現する」指導に力をいれる必要がある。

しかし、「多角形の外角の意味を理解しているか」を問う問題の正答率は全国平均を上回る(+1.6%)など「知識・技能」については家庭学習や小テストの継続によって定着がみられる。

今後は、題意を正確に把握し、思考して、その内容を適切な文章で表現できる力の育成に重点を置いて取り組みたい。

【理科】

現状課題の把握から探求、解決する能力が低いことが分かった。今後は授業内に問題を見出し自身の考えを持ち、表現するという探求のサイクルの機会を多く作ることで問題解決能力を養っていきたい。